

子育て支援プログラムの効果向上に資する要因の探索

— 幼稚園での実践に基づく考察 —

Explorations of factors related to improvement of pre-kindergarten parental support programs practiced by a kindergarten

日比野 直 子

Naoko HIBINO

【はじめに】

幼稚園は長く文部科学省（旧文部省）が管轄し、三歳以上児を対象にして一日4時間の保育を行う幼児教育機関として位置づけられてきた。しかし、社会的事情に応える形で、2000年には時間を延長して行う『預かり保育』や『満三歳児保育』、さらには二歳児保育を含む地域の子育て家庭に対する『子育て支援事業』の実施が要請されるようになった。これらの社会的・政策的要請の高まりの中で、任意ではあるが、幼稚園における三歳未満児保育や長時間保育の実施が始まった。乳児保育、長時間保育の実践の積み重ねのある保育所とは異なり、これは幼稚園にとって、大きなチャレンジであった。

これらの状況を受け、幼稚園における子育て支援の実践が進んだことは、関連する文献にも反映している。たとえば国立情報学研究所が運営するNII論文情報ナビゲーターを用いて「幼稚園」「子育て支援」で検索すると205件（2011年5月9日現在）の文献があった。その中には、幼稚園関係者による実践報告も少なからず含まれており、現場での実践経験の蓄積が進んでいることが窺われる。この種の実践報告は、幼稚園内部とそれを取り

巻く諸条件の違いによって、多様な知見を産出する。これらの実践報告の知見が現場での実践と社会政策に活かされる為には、子育て支援の現場の実践者・利用者双方の多面的視点に立った報告の蓄積を待つ必要がある。本論はその蓄積に加えられることを願ったひとつの報告である。

田澤（2010）は幼稚園が子育て支援に乗り出すことを奨励するわが国の政策の背景と、幼稚園による子育て支援事業の課題を、社会福祉の視点から考察した。幼稚園による子育て支援事業の効果に関して田澤は、3歳未満児の親子登園によって食事・排泄・睡眠などの生活リズムが子どもの身につくことを、成果と捉えている。また、支援プログラムの活動に保護者が積極的に参加することを通して親として成長し、自尊心を確認・回復することも重要な意味をもつとしている。さらに、子どもが将来に経験する可能性がある幼稚園生活に予め接して、保護者と子どもがそれに対する見通しをもつことは、入園という移行過程を円滑にするということを述べている。

また、川喜田・金田・霜出・大浦（2008）は、幼稚園の子育て支援に関わりをもつ親子は、金田らによって親にも子にも現時点では

リスクがないとされたAゾーンにおおむね位置すると考えられるが、支援が必要ないということではないと強調している。昨今の社会的状況を考えるとAゾーンであっても、何らかの課題を抱えた時、危機的状況に転じる可能性は否めないからである。そこで、予防的視点からも子育て支援は不可欠であるという立場から親子の遊びを通した学びを重視した幼稚園での子育て支援活動の実践の検討を行っている。

その他にも、長山・グラハム・山口・村山(2008)、名須川・岸本・小林(2008)、杉山・坂本(2004)等、幼稚園における子育て支援活動の実践研究は多数ある。これらの実践研究には、幼稚園が3歳未満児の地域の親子を対象とする子育て支援というチャレンジに対し、現場のスタッフが試行錯誤しながら真摯に取り組もうとする熱意と、この取り組みを通して対象親子のみならず子どもも親も、また在園児、さらには保育者もこの実践を通して共に育っていかうとする姿勢を感じる。これらの試みは従来の幼稚園の役割に留まることなく、社会状況に即して"幼稚園を開く"ということを意味し、新たな幼児教育現場の機能の展開を感じさせる。

現在、国によって『子ども・子育て新システム』の2013年実施が進められている。それに対して保育所、幼稚園の双方の現場では、議論が十分にされないままに踏み切ることに對する危惧の念が表明されている。このシステムは当事者である子育て家庭の子どもと親の視点に立ち総括的に熟慮されたものであるとは考え難く、性急な導入が子育てに関わる現場に混乱をきたすおそれがある。この新たな政策の動きがある状況に際しても、子育て家庭の最も近くで支援にあたっている支援スタッフの実践に学び、多くのことを明らかにしていくことは急務であると考ええる。

先行研究はすでに、幼稚園が果たすいくつかの子育て支援機能があることを示し始めている。しかし、支援機能がもっと多くの側面にわたることも事実である。子育て支援が果たす役割は、ケースによっても異なる可能性がある。さらに、同一ケースに関しても、子どもと保護者や環境条件の変化に伴って、子育て支援に期待される機能が変わって行くことも起こり得る。そもそも幼稚園までをも包含して実践されている多様な子育て支援プログラムが、現実にどのような役割を果たしているのか、そして支援プログラムの効果をどう捉えるべきかについての議論は、わが国では研究者、実践家、行政担当者のいずれにおいてもまだ十分に展開されていない。その議論を進める基礎として、多様な場で行われている支援の実践活動の内容とその効果に関する情報の蓄積が不可欠である。

前論文(日比野, 2011)も本論文も、ともに意図的に企画された実践研究ではない。これらは現場で保育者達が得た感触と気付きから出発して、よりよい実践に向けて現状を振り返り、問題点を見出し、改善を試みた一幼稚園における子育て支援の取り組みの軌跡をもとにした考察である。ことの始まりは、2008年度から筆者が幼稚園スタッフとして関わったキリスト教主義のL幼稚園において、子育て支援事業を担当するスタッフが発した「このままでいいのかな・・・。」というつぶやきを耳にしたことにある。このつぶやきをきっかけに、筆者が非公式に子育て支援スタッフや、幼稚園スタッフにヒヤリングを進めるうちに、いくつかの問題点に関するスタッフの意識の共有化が始まり、子育て支援事業の再構成に園全体として取り組む事となった。もちろんそれに先立つ6年間の試行錯誤的実践の過程においても、問題を解決する姿勢はあったが、課題やそれに対する改善策を明確にして、そ

の達成度を振り返る機会は持てなかった。改善を試みた2009年度の再構成プログラムに関しても、比較できる以前のデータがないために、その有効性を直接に示す事はできない。

そのため、本論文でも年度終わりに実施した質問紙調査に示された保護者の声（日比野、2011）をプログラム評価の重要な情報として用いた。それに加えて、前論文で課題として残したL幼稚園で子育て支援プログラムを経験した子どものフォローアップを実施した。これは、後に述べるように完全な群比較にはならないが、支援プログラムの有効性に関する一つの情報になると考えられる。幼稚園が行う子育て支援プログラムが、当面の子どもと保護者のニーズに答えているかを把握すること、また子どもと保護者側における幼稚園教育に対する広義の準備性の形成に何らかの効果をもつのかを園側が把握しておくことは、子育て支援プログラムと幼稚園教育の両方の意味ある実践の展開を検討するための大切な課題となる。そこで筆者は、幼稚園による子育て支援プログラム参加者のフォローアップを試みた。

このフォローアップは、入園後の初期段階における子どもと保護者の行動と状態を中心にして、L幼稚園での子育て支援プログラムへの参加経験が子どもと保護者に何をもたらしたのかを、L幼稚園での子育て支援プログラムへの参加経験をもたないで入園した場合との群比較から探ることを目的としたものである。ただし今回の2群は共に少人数であり、支援プログラムへの参加経験の有無以外の点で2群が等質である（すなわち、結果に影響する可能性がある他の条件に関して群間に差がない）保証はないので、この比較は探索的な検討に留まる。その結果の報告に入る前に、L幼稚園での子育て支援プログラムの再構成の取り組みを、簡単に説明する。

【L幼稚園の子育て支援プログラム再構成の取り組み】

L幼稚園はキリスト教主義に基づく、幼児70人の小規模の幼稚園である。異年齢児混合クラス編成と子どもの自発的活動を大切にする自由保育の形態をとる幼稚園である。この園の子育て支援への取り組みは2003年に始まる。園長や主任が関わることもあったが主として計画を立て実際の運営を任せられていたのは非常勤の子育て支援スタッフであった。スタッフの熱意による試行錯誤の中で実践が積み重ねられたが、参加者が減少するプログラムが出始めた。その原因の基本には、幼稚園スタッフが同じ園内で行われている子育て支援プログラムについて十分に認識できていないなど、幼稚園スタッフと子育て支援スタッフの連携がうまく働いていないという問題点が浮かび上がった。

それを受け、2008年度の終わりに、幼稚園と子育て支援スタッフ全員が情報提供や討議に参加し、L幼稚園が子育て支援に取り組む意義に関する学びと過去6年間に渡って試行錯誤的に進められてきた子育て支援事業の見直しを園全体の課題として行った。過去の状況を分析し、課題の認識と解決、プログラム内容の意味づけと再構成を行い、新たに2009年度の実践を始めた（日比野、2011を参照）。その再構成にあたっては、日比野（2008）の知見に基づく提起、すなわち、①母親・父親を主体とした子育て支援、②生活圏を重視した支援、③的確な情報提供を通じた支援、④ライフコースの視点に立った支援の考えを意識し、可能な範囲で取り入れた。

その結果2008年度には減少傾向だった参加者が、2009年度一学期のまとめでは52組の親子が継続して参加し、参加待機者が出るプログラムもあった。また何らかの意味で満足を得た参加者による情報が広まり、多くの問い

合わせが幼稚園に寄せられる状況となった。そこで、実践の効果を探るべく、プロセスにおける評価と総括的評価を行うことにした。プロセスにおける評価として、1学期末に支援スタッフに対し聞き取り調査を実施した。また総括的評価として、3学期末に参加保護者全員に対し質問紙調査を実施し、これらの結果を分析した。その結果、プログラムの構成と、幼稚園側と子育て支援スタッフに関する以下の3つの条件が、子育て支援事業の成果につながる可能性を持つものとして浮かび上がった。

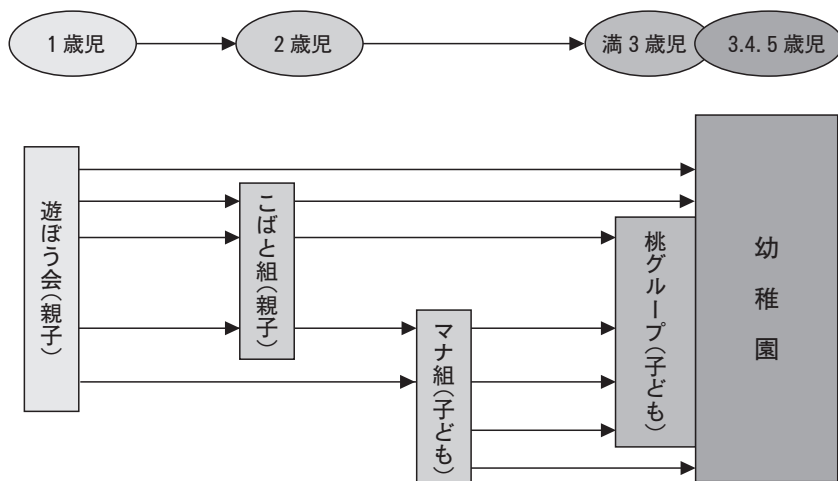
①園全体で子育て支援事業の意義に対する共通理解を進めたことは、幼稚園が地域の子育て家庭に対しても貢献しようという意識を高め、幼稚園と子育て支援スタッフが連携して子育て支援に取り組み、よりよい実践を展開できた。非常勤教諭である支援スタッフにも幼稚園スタッフと共に、子育て支援プログラムの見直しの段階から聞き取り調査や討議

に参加を求めるなど、実践当事者としての主体性をできうるかぎり尊重した。このことによって、支援スタッフの意欲が高まり、幼稚園スタッフとの相互連携が強まって、子育て支援プログラム実践の質的な向上につながったと思われる。

②各子育て支援プログラムのねらいを明確にし、親子が自分たちはどのような道筋を辿って進むのかという幼稚園入園以後をも含めた見通しが持てる展開性のあるプログラム構成にした（図1）。それによって参加者が現時点において自分たちにふさわしいプログラムを選択でき、満足度も高かったと思われる。後の総合的考察の項では、幼稚園入園以後も含めた見通しが持てる展開性のあるプログラム構成にすることがなぜ有効に働くのかということに対する理論的考察を深め、幼稚園におけるよりふさわしい子育て支援のあり方を論じる。

③年度末にプログラム参加保護者の質問紙

図1 L幼稚園子育て支援プログラムのシステム図



1歳児で遊ぼう会に親子で通い始め、2歳児では親子で楽しむこぼと組か、子どものみで週2回の保育を経験できるマナ組のいずれか選択できます。そしてお子さんの様子を見ながら、翌年の4月を待たずに満3歳児で入園できる満3歳児保育（桃グループ）、あるいは4月の入園までは、親子での生活を大切に過ごすという選択も可能です。

調査を実施して、子育て支援スタッフが、プログラム参加者の生の声に耳を傾けた。しかし、それ以前の段階でも、子育て支援スタッフは、プログラムに参加した子どもたちの状態と変化に注意を払い、保護者とも日常的にコミュニケーションを図って来た。そのことによって子育て支援スタッフ達は保護者と子どもの視点に立って自分たちの実践を振り返り、よりふさわしい実践の展開に役立てていくという循環性を確保していった。

次項では、この子育て支援を経て入園した子どものフォローアップを試み、親子に対して何らかの寄与をしたのかを考察する。

【子育て支援プログラムの効果に関するフォローアップ】

2010年4月にL幼稚園に26名の年少児が入園した。そのうち子育て支援プログラムを経験した子どもは16名である。幼稚園スタッフの間で例年と違った感触を得ていた。「年々新入園の年少児を受け取るのがしんどくなっていた。でも今年度はなんだかスムーズな気がする。何故だろう。」「子育て支援出身の子どもが多いからだろうか。」「自分から周りの環境に関わっていく子ども達が多い。」「幼稚園が楽しいところであるということがわかっているみたいで幼稚園に対し期待を持って通ってきていると感じる。」「お母さん達が、他児と比較してあせるということが少なく、子どもが自分のペースややり方で園生活に親しみ始めていくということを尊重している気がする。」などの声である。この幼稚園スタッフが得た感触受け、子育て支援プログラムの効果に関するフォローアップを試みた。研究協力者は、L幼稚園の幼稚園スタッフ、2010年度クラス担任3名である。

【方法】

対象者 2010年4月に、L幼稚園の3つの異年齢児混合編成（いわゆる「縦割り」）クラスに年少児として入った子どもと保護者26組を対象とした。そのうち16組（男女児各8名）は、L園での2009年度までの子育て支援プログラムに参加した経験をもつ群（今後、参加群と呼ぶ）で、10組（男女児各5名）はL園での子育て支援プログラムに参加した経験のない群（今後、無参加群と呼ぶ）であった。ただし、無参加群の中に、別の所での子育て支援プログラムに参加したケースが含まれているかは調べていない。なお、特別支援対象児が参加群に4名、無参加群に2名含まれていて、これら6名は全て男児であった。

評定法 入園後の初期段階に子どもと保護者が示す行動と状態のうち、幼稚園教育の視点から重要だと筆者が考えた子どもに関する6つ特徴（項目）と、保護者に関する3つの特徴（項目）を取り上げた。それぞれの4段階での評定を3クラスの担任教諭に求めた。評定票の体裁と項目は付録に示してある。

前論文（日比野、2011）で述べたように、これらの担任は幼稚園による子育て支援プログラムの支援スタッフとして、直接に参与したことはなかった。なお、この評定は、異年齢の幼児で構成するクラスに入った年少児と保護者の初期の行動と状態を把握するためのものであるから、遅くとも2010年度1学期中に評定すべきであった。しかし、その時期に評定しておくことの意味に気づくのが遅れて、実際には2学期終了後に、初期の行動・状態についての評定を求めた。担任教諭が初期の記録を参照したとしても、後の時期に評定したことが何らかの歪みをもたらした可能性は残る。なお、3名の担任教諭が評定したのは、それぞれ、子ども・保護者7、5、4組分で、いずれも参加群と無参加群を含み、また少な

くとも1名の特別支援対象児を含んでいた。

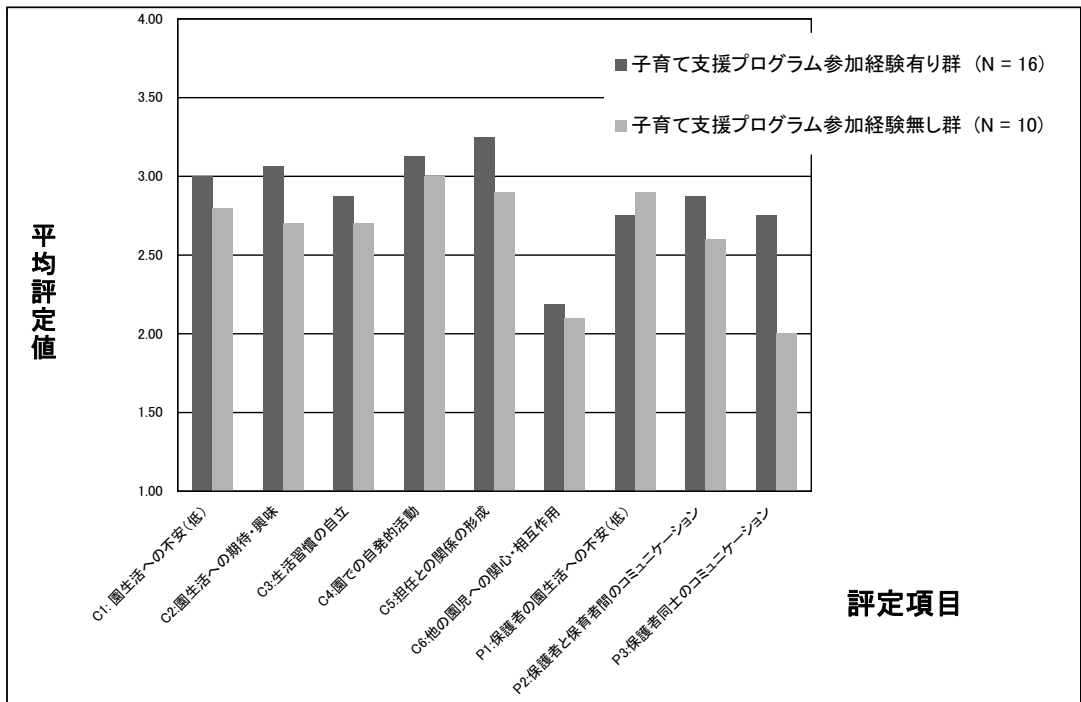
【結果と考察】

3名の担任教諭による評定の結果は、2つの視点から分析した。まず、子どもに関する6項目と保護者に関する3項目に関して、項目別に参加群と無参加群の平均評定値と、その群差を統計的に分析した。次に、子どもに関する6項目の評定と、保護者に関する3項目の評定のそれぞれに関して、項目評定値の間にどのような相互関係が認められるのか、そして更に、子どもに関する評定と保護者に関する評定の間にどのような相互関係が認められるのかを統計的に分析した。以下に分析結果を述べて、その意味を考察する。

項目別に見た群差の検討 図2は、L園での子育て支援プログラム参加群と無参加群の項目別評定平均値の比較を示している。全体

的にいって、大きな群差は認められなかった。子育て支援プログラムに参加経験の有無が統計学的に意味のある差（有意差）を示したのは、保護者間のコミュニケーション（P3）に関してだけであった（*t*検定による。1%水準）。担任とのコミュニケーション（P2）では出なかった群差が、保護者間のコミュニケーションで明確に現れたのは、子育て支援プログラムへの参加経験の効果だと考えられる。実際、2009年度末実施の参加保護者への質問紙調査の自由記述にも「同じ年の子どもを持つお母さん同士、悩みを共有できたり、ゆったりとした雰囲気の中でおしゃべりをしながら楽しく過ごせました。」など同じ年齢の子どもを持つ親ならではの悩みを共有できたり気兼ねなく過ごせたとの声が上がっている。L園での子育て支援プログラムは、自由遊びや園庭解放の時間に参加者同士が自由に

図2 子育て支援プログラムへの参加経験の有無による入園後初期の子どもと保護者の状態の群比較（クラスの担任による評定）



交わるようにするなど、保護者同士のコミュニケーションの機会を促進する契機となる配慮が幾つか含まれていて、このプログラムへの参加を続けているうちに、保護者同士のコミュニケーションが展開したものと推測できる。また、「子どもはもちろん親自身も楽しみに参加させていただきました。」や「当初はお友達と関わるのが難しく手がでてしまうことが多かったのが悩んでいましたが、先生方をはじめ『こぼと』（二歳児対象親子参加プログラム）の保護者の皆さんに温かく見守っていただく中でのびのびと遊べた事は本当によかったです。」という記述にあるように、幼稚園という場が楽しいものであり、またありのままの自分たち親子を受けいれてもらえる保護者や保育者で構成する大人たちの集団があることを体験的に感じてきたことも、子どもの入園と共に親集団に入る緊張感を幾分か和らげたと思われる。

無参加群での保護者間のコミュニケーションの平均評定値が2.0という低い値であることは、入園後2ヶ月頃としては不思議ではないかも知れないが、その後どのように変化したかの経過を注視する必要がある。なぜなら、次項の相関分析で述べるように、保護者もつ対人関係の深まり・拡がり、子どもの対人関係の展開と自立に結び付く可能性が高いからである。

次に、子どもの担任との関係の形成（C5）に関しては、統計学的には有意ではないが、有意傾向（10%水準）の群差が見られた。幼稚園の担任は子育て支援プログラムに直接参加していなかったのに、参加群の子どもは新たに接した担任と初期から相互作用をもち、関係の形成が進みやすい傾向を示した。入園前の支援プログラムで接した教諭が入園後に担任しなくても、社会的相互作用を促進する傾向があるというこの結果が一般性をもつも

のか、あるいは特定の条件下で成立するののかについては、今後の研究の蓄積を待つ必要がある。

子どもの項目のうち、他の園児への関心と相互作用（C6）の平均評定値が、他の項目よりも両群とも目立って低かった（2.19; 2.10）。これは参加群にとっても、それまで同年齢グループの仲間と接触していたのが、4月から縦割りの異年齢児混合クラスに年少児として入ったことによるものかも知れない。また、L幼稚園は子どもの自発的活動を大切する自由保育の形態をとっている園であるため、保育室や園庭は子ども達のニーズを予想して多様な環境設定がなされている。縦割りの年中・年長児は4月当初からその環境を活用し、工夫して遊びを展開する姿があり、保育形態の特徴からC6よりもむしろC4への刺激が活発に働く傾向があるのかもしれない。L幼稚園の保育記録にも、その傾向は例年あることが記されている。年少児はまず、担任保育者が在園のきょうだい、あるいは近所に在住しているなど入園前から日常的に接していた年上の子どもに依拠するか、あるいは、好きな遊びや遊具に依拠する傾向がある。その頃の年少児の他児との関わりは、遊びたい遊具をめぐるの取り合いや世話をしてくれる年上の子どもの保護を受ける関わりが多く、その後個人差はあるが6月・7月の一学期終わり頃になって、他児との関わりが始まる。

なお、図には示していないが、男女差と特別支援対象児に関して簡単に触れておく。まず、評定値の男女差は殆どなかった。次に、特別支援対象の子ども合計6名の平均評定値と、対象外の子どもの平均値との差は大きくなかった。それには、評定に当たっての教示、すなわち、「特別支援対象の親子が含まれている場合には、特別支援対象外の子どもの基準をそのまま当てはめるのではなく、その子

どもに応じた行動と発達の基準で判断してください。」も関係しているであろう。ただし、無参加群の2名の生活習慣の自立の評定値が1であるのに対して、参加群の4名の評定値は、3か4となっている。これは、参加群の保護者と子どもに対する子育て支援プログラムがもたらした可能性がある。ただし、障がいの種類・程度や、それまでに専門機関等で受けた援助・指導の有無も考慮に入れて個別に調べる必要がある。

一般的にいて、保護者と子どもの対人的・社会的スキルの一部を除いて、2010年4月に幼稚園の3つの異年齢混合編成クラスに年少児として入った子どもと保護者の初期の行動・状態に関しては、参加群と無参加群の間に大きな差は認められなかった。参加群の中には、幼稚園が2009年度に実施した満3歳児保育（満3歳に達した子どもを、保護者の希望により随時幼稚園児として受け入れて1クラスを編成して年度末まで維持した）に移行した9ケースが含まれていたのに対して、無参加群には他の幼稚園での満3歳児保育を受けていた2ケースがいた。この違いも2010年4・5月段階の保護者と子どもの評定に何かの影響を及ぼしていた可能性を考慮に入れると、子育て支援プログラムの効果は、今回使用した多くの項目で目立った群差として現れるような性質のものではなかったといわざるを得ない。

もちろん、入園初期だけではなく、保護者と子どものその後の変化を調べるのが重要である。そのためには、入園後初期の適応に重点を置いた今回の評定方法を改訂して、卒園までの個別ケースのフォローが可能なシステムを考慮することが、今後の課題となる。

相関分析による検討 前項の分析は、2群の平均評定値の違いの有無に関するものであった。しかし、各項目の評定値には各群内で散

らばりがある。その個人による散らばりに注目するのが、評定項目間の相関分析である。今回は対象人数が少なく高度な分析法は適用できないが、項目間の相互相関を分析することから、フォローアップに関連する何かの情報を引き出せる可能性はある。

そこでまず、子どもに関する6項目の評定間の相互関係を求め、また保護者に関する3項目の評定間の相互関係を調べた。子どもに関する6項目の評定の間の相互関係を分析するために、6項目の全ての組み合わせについて、評定値のピアソンの相関係数を求めて、相互相関行列にまとめた。その際に、26名のデータ全体を使用して計算した相互相関行列だけでなく、参加群だけ及び無参加群だけのデータを使用した相互相関行列を別々に作成して検討して、2群のデータをまとめて分析しても問題がないことを確認した。同様のことは、保護者に関する3項目でも成り立っているので、その後の分析は26ケース全体で行った。

その結果、子どもに関する6項目は、項目間の相互相関のパターン（正の高い相関）に注目して2つの尺度にまとめた。すなわち、「活動への積極的参加」と名付けた尺度は、項目1、2、4の合計得点である。そして、「子どもの対人関係の展開と自立」と名付けた尺度は、項目3、5、6の合計得点である。保護者に関しては、項目2と3をまとめて「保護者がもつ対人関係の深まり・拡がり」尺度と名付けた。なお、残った保護者の項目1は、「子どもの園生活に関する保護者の不安の低さ」として単独で用いた。

このようにして得た保護者と子どもの特徴を表す尺度値の間にどのような関係があるかを調べた結果は以下のものであった。まず、「保護者がもつ対人関係の深まり・拡がり」と「子どもの対人関係の展開と自立」との間には、高い結び付き（ピアソンの相関係数 r

=0.63) が認められた (これは0.1%水準で統計学的に有意)。このことは、保護者がもつ対人関係が深く拡がり大きいほど、子どもの担任と仲間の関係の形成が進み、生活習慣の自立度も高いことを意味している。ただし、一方が他方の原因であるとは限らず、両者間に循環的な関係による可能性もある。なお、「保護者がもつ対人関係の深まり・拡がり」と、子どもの園での「活動への積極的参加」との間には関連が認められなかった。このことから、上記の「保護者がもつ対人関係が深く拡がり大きいほど、子どもの担任と仲間の関係の形成が進む傾向がある」という結果は、保護者と子どもの双方にとって、対人関係の成立と社会性の形成が果たす役割の重要性を示唆するものと解釈できる。

次に、「子どもの園生活に関する保護者の不安の低さ」は、子どもの園での「活動への積極的参加」と、「対人関係の展開と自立」と結びついていた ($r=0.55$; $r=0.52$)。これらの相関係数はともに、1%水準で有意なものである。これは、子どもが初期から幼稚園の活動に積極的に参加して対人関係もうまく成立し、身近の自立にも問題がないことがわかると、最初は少々不安を懐いていた保護者でも不安が低まる場合もあることを示唆する。それとは逆の方向の影響関係は、保護者の一般的不安水準が高すぎて自分の不安を子どもに投射するために、子どもによくないことが起こってはいけなさと考えて子どもの活動に制限を加えたりすることによって、子どもが幼稚園に不安を感じるようになって、積極的な行動が抑制される場合である。

【結 論】

子どもと保護者側における幼稚園教育に対する広義の準備性の形成に対して、L幼稚園が実施した子育て支援プログラムが何らかの効

果をもったのかという問いに関しては、入園後の初期の時点でのフォローアップでは、子育て支援プログラム参加群と無参加群の間に、多くの側面で目立った群差が認められなかった (図2)。しかしながら、保護者の対人関係の深まり・拡がり、子どもの対人関係の展開と自立との間には、強い結びつきがあることが見出されたことは、子育て支援プログラムと幼稚園教育の両方に対して意味がある。また、特別支援の対象となる子どもにとっても、幼稚園が実施した子育て支援プログラムが効果をもつケースがあり得ることも示唆された。ただし、今回報告したようなL幼稚園による子育て支援プログラムが全ての対象に対して同様の効果を期待することは、もともとできない。支援プログラムの内容と対象者の特徴との組み合わせが、効果の有無につながり得ることは理論的に予想できるが、その解明には組織的研究が必要である。

今回は子育て支援プログラム参加群と無参加群に分けて、それは2つの違った母集団に属するという前提で比較検討した。しかし、今後の検討課題であるが、無参加群には、かなり多様なケースが含まれている可能性がある。例えば、①保護者・子どもと、それを取り巻く環境側に必要な支援の資源がすでに備わっていて、幼稚園などが提供する子育て支援のプログラムを利用する必要がないケース、②専門家の視点では、子どもの育ちと親の状態が子育て支援を必要とするものだと判断しても、保護者が子どもや自分が抱える問題性を洞察できずに、幼稚園や他の専門的支援プログラムに関心を示さないケース、③子育て支援プログラムには関心があるが、時間的・経済的条件などのために参加できないケースなどが考えられる。専門的支援や社会福祉的支援が必要な②と③のケースに対して、幼稚園として何かの役割が果たせるかを考える必

要がある。

【総合的考察】

以上の結果と論議に基づいて、子育て支援と幼稚園教育に関する4点を取り上げて論じる。

1. 子育て支援のフォローアップ結果の分析 結果からの知見

子育て支援のフォローアップ結果の分析は、子育て支援と幼稚園教育に関するいくつかの重要な知見をもたらした。子育て支援プログラムへの参加が、保護者間のコミュニケーションを促進したことは、L幼稚園の再構成した子育て支援プログラムの効果であったと言える。また、保護者の対人関係の深まり・拡がり、子どもの対人関係の展開と自立との間には、強い結び付きがあることが見出された。このことにより、子育て支援や幼稚園教育において、対人関係の深まりや拡がりを意識したプログラムや親と子の育ちの双方の循環性を意識したプログラム展開が有効であることが示唆されたといえる。

L幼稚園では、在園児親子に対し毎日降園後1時間程度の園庭開放を行っている。降園後は、園児も疲れが出て怪我の率も高くなることから、一時期、園庭開放を取りやめる議論も起こった。しかし「近所には子どもを安心して遊ばせる環境がない。子どもの安全は保護者が責任を持つからぜひ存続して欲しい。」と強い要望があり、現在も継続している。保育時間外であるので参加は任意である。しかし、ほとんどの親子が利用し、保護者同士のコミュニケーションが活発になされている。安心できる環境の中で、自由に交われる時間は、子育て期にある保護者にとってこそ、必要なかもしれない。

子育て支援プログラムにおいても、自由遊

び時間中の交わりやプログラム終了後の園庭開放の時間が対人関係性の促進に役立っていると考えられる。このように考えると、子育て支援はもとより、幼稚園教育の場においても、子ども同士はもとより、親の対人関係性の促進に役立つ機会を取り入れる事を重視すべきだと思われる。その際、対人関係の形成における個人差にも充分配慮し、個々にあったペースで交わりを深めていくことが可能な形をとることも大切である。

三歳児での入園時にオムツが取れていない子どもの存在は、今やあたり前に見られるようになったが、幼稚園入園と同時に着替えを多めに持たせ、パンツで過ごすことを保護者に提案して実施すると、間もなく、自立できるようになるケースが多い。モデルとなる同年齢児や年上の友達も関係しているが、子どもの中にはすでに排泄自立への準備性が整っていることが多いというのが実感である。子どもをよく観察し、タイミングをつかみ排泄を促すことの難しさや、失敗されたくない・汚されたくないという大人側の事情のためにオムツで過ごさせ、生活自立が遅れているケースも少なくないと感じている。このように、子どもたちが生活の自立を阻害されている状況に置かれているのは事実である。モデルになる同年齢児や年上の友達とともに過ごす集団保育の特徴を生かし、生活自立を促す場面を子育て支援の場に取り入れて親子で共に体験していく事は重要な意味を持つ。また、幼稚園教育の場では、その場面に保護者が立ち会う事は難しいが、生活自立を促す場面を大切に、降園時に自立していく様子を細かに伝えることが有効である。またその他、園生活における、対人関係に関する姿や周りの環境に対する働きかけについてもよく観察し、細かに保護者に伝えることにより、「子どもの園生活に関する保護者の不安」が低減され、

不安の低減は、子どもの園での「活動への積極的参加」と「対人関係の展開と自立」に結びつくというプラスの循環が期待できる。幼稚園入園初期の課題として「保育者は子どもや保護者と信頼関係を結ぶ」ということがあるが、保護者に対して何を伝えてよいのか迷うことがよくある。もちろん個人差はあるが、保育者が年度当初抱くこの問いに、いくらかの示唆を与えるものである。

2. L幼稚園の子育て支援プログラムによる学習効果

日比野（2011）に示すように、2009年度のプログラム再構成の際に、「子育ては母親になったら自然とできる本能ではなく、学習し会得していくものである」という立場から、一歳児・二歳児各々の親子がかかえる課題を意識し、必要な学習の機会をプログラムの中に取り入れている。2009年度末実施の質問紙調査において、「申し込み時に当事業に対し期待した事」という問いに対し、「子育てのヒント・情報を得るため」と回答した保護者は3割を超えており、子育ての情報やヒントを求めていることがわかる。また、自由記述欄にも、「歯磨き講習は特に役に立ちました。これがきっかけで保健所の親子歯磨き（フッ素塗布）にも行こうと思いました。」「専門の先生方のお話が聞けたことがよかったです。」と外部講師によるレクチャーが有意義であったという回答がみられた。また、「おやつ作りを家でもやってみたら子どもがすごく喜んだ。」や「手作りの楽しさを教えていただきありがとうございます。」など普段接する支援スタッフによるプログラムにより、親子で生活を楽しむヒントが得られたという声が多数あり、「子育てのヒント・情報を得る」ことを目的とした保護者もおおむね満足を得たと考えてよい。

また、「先生方は質問に答えるだけではなく、状況に応じてさりげなくアドバイスをしてくださるのがうれしかったです。」などの声もあった。これは、情報化の進んだ社会にあって、多くの情報が得られる昨今ではあるが継続的に共に過ごす支援スタッフと参加保護者とのやり取りを基盤とする情報は、より実情にあったふさわしいものであることを意味している。また同じ支援の場に同じような悩みを抱えている参加者集団の存在があることで、得た情報を互いに話題にする可能性は高く、話し合うことにより理解が深化し、より有効に働くのではないかと推測される。多人数を対象とする講演会やイベント的な支援の場ではなく、L幼稚園のような少人数のグループを形成し継続的に通う形態の子育て支援の場は、支援スタッフと保護者間、また保護者間の関わりを深めていくことが可能である。このように当事者の視点に立った子育てに関する適切な学習内容を含んだプログラム作成と対人的な条件が整うことにより、子育てに関する学習効果が期待できると思われる。

3. L幼稚園の子育て支援プログラムと幼稚園教育に共通する潜在的カリキュラム

「お母さん達が、他児と比較してあせるといことが少なく、子どもが自分のペースややり方で園生活を親しみ始めていくということを尊重している気がする。」これは、2010年度の三歳児の保護者に対する印象についての幼稚園スタッフのつぶやきである。

今回のフォローアップでは、これを子育て支援プログラムの効果の一面として調べる項目は無かったが、日比野（2011）でも述べた様に、2009年度末に実施された保護者への質問紙調査の自由記述欄には、以下に例示するような類の感想が多数書かれていた。「一人

ひとり、とことん大切にしてくださることに感謝しています。」「先生方はとてもあたたかく、そのらしさをありのままに受けいれてくださる雰囲気でした。子どもの気持ちを汲み取って寄り添う先生方の姿勢には親として見習いたいことばかりでした。」「子どもにプラスの言葉がけをたくさんしてくださいました。」「先生方がどなたも大変優しく挨拶をしてくださり感謝しています。日々の忙しさに追われ、子どもを認める、ほめるということを忘れてしまいがちでしたが、園に行く度に先生方子ども達への接し方を見て気付き反省することができました。」「親として気になるわが子の部分も先生方が受けいれつつ対応してくれて不安が減った。」「子どもの意見を否定せず、その思いに寄り添って待つて下さる環境で子どもが過ごせたことが何よりよかったです」と感じます。」など。同様の感想は、2010年度末に実施した子育て支援プログラムに参加した保護者への質問紙調査でも多く見出された。

これらは、それぞれの子育て支援プログラムが意図的に設定したねらいと内容自体だけでなく、子どもに接する支援スタッフの態度と言動、そしてその基盤にある子ども観から保護者が自発的に学び取って自分の態度や行動を振返るモデルとしたケースが少なからずあったことを示している。そして、それを意識化・言語化して他の保護者たちとコミュニケーションした可能性も考えられる。これは、一種の潜在的カリキュラム（hidden curriculum. 隠れたカリキュラムとも訳される）としての作用を果たしたものと見える。新社会学辞典（森岡清美他（編）有斐閣、1993）によると、潜在的カリキュラムは「学校が明言することなく暗黙のうちに教え込んでいる規範・価値・態度のこと」と定義されている。このような暗黙裡の信念・価値体系

の現れを保護者が読み取り、子育ての重要な側面として学んだのである。堀越・安藤・荒牧・丹羽・岩藤・無藤（2008）の全国35園の幼稚園園長に対して行った子育て支援に関するインタビュー調査の中にも、子育て支援の成果の一つとして、保育者の関わりを見て子どもの叱り方や待ちかた、言葉使いなど望ましい関わりかたを学んだり、自分の子育てを見直したりする姿がみられたことがあげられている。

日比野（2011）に記したように、2009年度の子育て支援プログラムの準備段階において、L幼稚園の幼稚園スタッフと子育て支援スタッフの全員によって、「キリスト教精神をもって、地域の子育て家庭への支援を行う」ことを改めて確認した。その中心的内容は、神によって創造された子ども達一人ひとりかけがえの無い存在であり、尊重されるべきものである。また、その育つ道もすべて神さまが守り導いてくださるとする信念のもと保育を展開するというものである。実際2009年度の子育て支援スタッフ4名のうち1名のみがクリスチャンであるが、1名は長くキリスト教保育に携ってきたスタッフであり、残りの2名もL幼稚園の補助スタッフや子育て支援スタッフとして、あるいは保護者としてキリスト教保育に関わってきたものである。L幼稚園で大切にしている子ども観と保育者の接し方の基本的姿勢が、子育て支援プログラムでのスタッフの姿を通して、保護者に伝わったといえる。

上記のことが、キリスト教保育をおこなっている幼稚園教育と子育て支援プログラムの全てで起こるとは言い切れない。また、L幼稚園の子育て支援プログラムに参加した保護者の多くが意味ある体験だったと評価したのと類似した内容の気づきがキリスト教保育以外の子育て支援プログラムで起こる可能性も

ある。さらに、別の子育て支援プログラムが、L幼稚園の子育て支援プログラムに参加した保護者が気付かなかった別の事柄を意味ある経験だったと評価することも起こるであろう。

要するに、筆者が強調したいのは、子育て支援プログラムにおいても、潜在的カリキュラムが重要な働きをする可能性に気付くことの必要性である。また、反対に、潜在的カリキュラムがマイナスに働く可能性もある事も意識しておく必要がある。青野（2008）や三村・力武（2006）の先行文献では、学校や保育現場における潜在カリキュラムによるジェンダーの再生産の問題を扱っているが、子育て支援の現場においても同様のことが起こりうる。その意味で、潜在カリキュラムがもたらす可能性をも意識して、子育て支援プログラム構成やスタッフ研修を行う必要性が示唆される。

4. 幼稚園入園以後も含めた見通しが持てる展開性のあるプログラム構成の有効性

日比野は（2008）は、幼稚園在園の子どもを持つ母親・父親に面接調査をし、ライフコースの中での子育ての位置づけ方、子育て観と親役割観・家庭状況と子育ての状況を明らかにしながら、ライフコース選択や子育て意識・行動に關与する社会的・文化的条件の特徴は何か、子育て期において母親・父親が持つ困難や戸惑いの内容、また何に支えられながら子育て役割をライフコースの中に組み込んでいくのかを検討した。

その中で、母親・父親は、子どもの出生の喜びと共に子育て役割をどう受け入れていくかという重要な課題に直面する時期であることがわかった。子育て自体に対する困難や生活の中で生じる困難だけではなく、自分の人生の中に子育て役割をどう組み込んでいったらよいかを模索するのが子育ての時期であ

る。その模索は、一過性のものではなく、幼稚園入園後も続くものである。L幼稚園では、年2～3回個人懇談会を行っているが、準備された15分で終了する例はごく稀であり、30分以上経過してもまだ話足りない様子の保護者は多い。内容は、子どもの成長や今直面している課題についてだけでなく、付随して、子育て中に生じる母親の苛立ちについての吐露が含まれることも少なくない。

図1に示したのは、L幼稚園の子育て支援プログラムのシステム図である。一歳児の親子参加プログラム「遊ぼう会」、二歳児親子参加プログラム「こぼと」、二歳児保育「マナ」を、家庭保育しているそれぞれの親子が持つと思われる課題を意識したねらいを定め、プログラムを構成している（詳細は日比野、2011を参照）。また、二歳児ではプログラム選定も各親子の主体性を大切に、入園までを親子で過ごすのか、また二歳児の年度当初は親子で過ごし、子どもの様子を見ながら子どものみの二歳児プログラムに移行して三歳児で入園するなど、親子が自分たちにふさわしい道筋を見つけ選択することができるようにしている。そこには、子育て期の歩み方は一通りではなく、その親子がこのように過ごしたいという選択をして欲しいというメッセージが込められている。またその選択を幼稚園は可能な限りサポートしていくという思いも込められている。家庭保育をする親子にとって、幼稚園入園前の3年間は、どこにも所属の無い、いわば保護者が全責任を引き受けているような状況である。先の質問紙調査においても「自分の場所が家庭だけでなく、別にもあり楽しく過ごせることができた。」「先生はやさしく明るく、孤独な子育てをしている母親にとって心地よくあたたかい存在でした。」という記述にもあるように、孤独な家庭保育の親子にとっての居場所としての存在である

ことが重要であることを表している。また幼稚園になれば、年少組、年中組、年長組、小学校に上がれば1年生、2年生と進級していくため、生活に目標や区切りがつけられるのに対して、それまで3年間はそれもなく、閉塞感が高まりやすい状況に置かれる。そこで地域の幼稚園がその時期に感じる子育ての喜びや困難を一緒に分かち合おうというスタンスで存在することは家庭で保育する子育て家庭にとって意義深いと思われる。

田澤（2010）は、「母親が専業主婦家庭の場合、いずれ子どもは幼稚園に入園する可能性が高い。そのため、最初から幼稚園の子育て支援事業を利用した方が、支援の連続性が確保されやすい。」とし、幼稚園が子育て支援に取り組むことの有効性の一つとして、連続した支援の可能性について言及している。2009年度末に実施した幼稚園子育て支援参加保護者質問紙調査において「申し込み時に当事業に対し期待した事」という問いに対し、「幼稚園の情報を得るため」と答えた保護者が一歳児も含め2割あった。子どもの成長は、保護者の子育て行動に対する励みでもある。日々子育てに取り組んでいる保護者は子どもが成長する近い未来に期待を持っている。過ぎてみれば長い人生の一時である子育て期も永遠に続くかと思われる場合もある当事者の保護者にとって、見通しを持つことのできる支援は意味あるものであると思われる。ライフコースの視点で子育て支援を見ることによって、保護者が子育て役割を受け入れていく過程を支える方策の一つとし、子育て親子のニーズに応えたプログラムの体制を持つ事と、所属感や年度ごとの区切り感を保護者にもたらすことができる事は、有効であると考えられる。

【今後の課題】

最後に今後の課題として、以下の5点を挙げる。

- ライフコースの流れの中で、幼稚園が現在行っている1歳から3歳までを対象とした子育て支援と満3歳から就学までの幼稚園教育を継続的な支援という視点でさらに深め探求していく必要性和就学前までのフォローアップの実施と分析と分析結果の実践への反映。
- 今回のフォローアップの分析結果から見出された対人関係の側面での知見の更なる分析と実践への反映・省察。
- 子育て支援の特別支援対象児にとっての有効性について探求すること。
- 子育て支援に参加しないが、専門的支援や社会福祉的支援が必要なケースに対して、幼稚園として何らかの役割が果たせるかを考える必要性。
- 個々の家族が、諸機関が提供する子育て支援のシステムをどのように活用しているのか。そこに幼稚園による子育て支援事業はどのような位置を占めるのかの解明。

引用文献

- 青野篤子（2008）園の隠れたカリキュラムと保育者の意識。福山大学人間科学部紀要8，19-34
- 日比野直子（2008）現代に生きる母親・父親のライフコースにおける子育て—子育て支援に関する基礎的研究—。金城学院大学人間生活学研究科修士論文。[未公開]
- 日比野直子（2011）幼稚園における子育て支援の在り方の探求—プログラムの構造化と親による評価の分析—。あいち保育研究所研究紀要2，18-35
- 堀越紀香・安藤智子・荒牧美佐子・丹羽さかの・岩藤裕美・無藤隆（2008）子育て支援における幼稚園の役割—預かり保育と未就園児支援に関する園長インタビューから—。大分大学教育福祉学部研究紀要30(2)，143-155

- 川喜田昌代・金田利子・霜出博子・大浦陽子 (2008) 幼稚園における未就園児をもつ親子のためのワークショップ ―遊びを介した親子関係の発展をめざした幼稚園の子育て支援の取り組みから―. 白梅学園大学短期大学紀要 44, 47-62
- 三村保子・力武由美 (2006) 保育・子育て実践における「個の尊重」―ジェンダーの視点から再考する―. 西南女学院大学紀要 10, 143-152
- 長山篤子・グラハム里美・山口結香・村山順吉 (2008) 聖学院みどり幼稚園における子育て支援「わかば」の二年間の活動報告 ―聖学院大学児童学科子育て支援センター「わかば」の基盤としての省察―. 聖学院大学論叢 21(3), 105-121
- 名須川知子・岸本美保子・小林みどり (2008) 幼稚園における地域子育て支援活動の探求 ―兵庫教育大学附属幼稚園における園庭開放の意味―. 学校教育学研究 20, 67-72
- 杉山弘子・坂本由佳里 (2004) 幼稚園における子育て支援の実践研究. 尚絅女学院短期大学研究報告 51, 23-33
- 田澤 薫 (2010) ひとりで背負わない子育て ―幼稚園における子育て支援事業「親子登園」に関する児童福祉的検討―. 聖学院大学論叢 23(1), 48-55

謝 辞 本論文の執筆にあたり、多くの方々のご協力がありました。

第一に筆者が2008年度より幼稚園教諭として関わらせていただいたL幼稚園の園長先生、副園長先生はじめ、幼稚園スタッフ、子育て支援スタッフの皆さんに深く感謝いたします。L幼稚園は、大変小さくまた経済的困難の中にある幼稚園です。「試み」にあい、何度か存続の危機に立たされました。しかし、この地に教会の幼稚園がある意味を祈り求め、信念をもってよりよい保育の場を展開すべく、日々子ども達や保護者と向き合う努力を重ね、今日に至っています。目に見える輝かしい成果はないかもしれない。しかし目に見えないけれど大切なものを育てていこうというスタッフから、私はたくさんを学びました。共に生活する中で学んだ事を少しでも明らかにし、子育て家庭への支援に貢献できればという想いで本論文を執筆しました。

またこの実践を質問紙調査やその育ちゆく姿を以て示し、省察の機会を与えて下さったL幼稚園の子育て支援プログラム参加親子、及び幼稚園在園親子のみなさんに深く感謝いたします。

また、名古屋大学名誉教授小嶋秀夫氏にも深く感謝いたします。今回の執筆にあたり、父でもある氏から、現場で得た感覚を明らかにするために数量的方法の活用を薦められ、その可能性について手ほどきを受けて本論文に活かしました。この経験を通し、筆者がこれまで用いてきた聞き取りを主とした質的方法と合わせて、さらに研究の幅を広げ深めることができたと感じます。

2011年5月9日

付 録

◇ 子育て支援の有効性を調べるためのフォローアップ評定 ◇

この調査は、当園の子育て支援の有効性をはかるためのものです。2010年度年少児26名全員の子どもと保護者のうち、自分が担当した全ての親子について、2010年度の生活開始当初（4月～5月を中心に）における子どもと保護者の状態に関する以下の項目について、4段階のうち最もよく当てはまる数字に○をつけてください。なお、特別支援対象の親子が含まれている場合には、特別支援対象外の子どもの基準をそのまま当てはめるのではなく、その子どもに応じた行動と発達の基準で判断してください。

対象幼児名 _____ 性別：男 女 生年月：200__年__月

I 2010年度の園生活開始当初（4～5月）の子どもの様子について

- Q1. 親子分離を含めて、園生活に対して不安を示していましたか？
- 1 長期間親子分離が困難な状態が続き、園生活に慣れるのにも時間がかかった。
 - 2 当初は親子分離が困難な状態であったが、徐々に園生活に入れるようになった。
 - 3 当初から強い不安を示さず、割合スムーズに園生活に入れた。
 - 4 当初から不安は殆ど示さず、積極的に園での生活に入った。
- Q2. 園生活に対して、積極的な期待や興味を示しましたか？
- 1 園生活に関心が向かず登園をしぶっていた。
 - 2 当初は期待と関心がなかったが、徐々に期待を持ち始め喜んで登園し始めた。
 - 3 当初から期待と関心があり喜んで登園はしていたが、徐々に行動に表れはじめた。
 - 4 当初から園生活に対する期待と関心が明確にあり、喜んで登園し積極的な活動をした。
- Q3. 排泄・食事・身支度などの生活習慣の自立に向かっていましたか？
- 1 生活習慣の自立は全般的に未達成で、自立に向かう構えも形成されていなかった。
 - 2 生活習慣の自立に向かおうとする構えはあっても、進行はゆっくりであった。
 - 3 生活習慣の自立への準備性が整っていて、実際に自立に向けた進歩が見られた。
 - 4 生活習慣の自立度が最初から高く、早期のうちに目標を達成した。
- Q4. 園の環境と活動（遊具や遊び、素材）に自分から関わろうとしていましたか？
- 1 当初は自発的に関わる事がなく、保育者が誘導しても活動を始めることは少なかった。
 - 2 当初から園の環境と活動に関心は見せたが、自発的に活動を始めることは少なかった。
 - 3 当初より、活動の程度や種類は限られていたが、興味のある活動への参加があった。
 - 4 当初より様々な遊具や素材を積極的に関わり、自発的に様々な活動をした。

Q5. 保育者に関心を示しましたか？

- 1 保育者を自分と関わる特別の人という認識が形成されておらず関心も示さなかった。
- 2 保育者を自分と関わる特別の人という認識が形成されるには、時間がかかった。
- 3 保育者とのやりとりの積み重ねを通して、保育者を信頼できる人として認識した。
- 4 当初から保育者に関心を持って積極的に近づき、様々なやりとりを繰り返した。

Q6. 園の他の子どもに関心を示しましたか？

- 1 他の園児の存在に気づいても、相手に目立った関心を向けなかった。
- 2 他の園児に関心をもち、徐々に散発的な接触をするようになっていた。
- 3 他の園児に強い関心をもち、相手の特徴を徐々に理解して、働きかけ始めた。
- 4 当初より他の園児に対して強い関心をもち、積極的に社会的かかわりをもった。

Q7. その他に特に気付いたことがあれば記述してください。

II 2010年度の園生活開始当初（4～5月）の保護者の様子について

Q8. 親子分離を含めて子どもの園生活への適応に不安を示していましたか？

- 1 親の子離れが困難な状態が続き、園を信頼して子どもを委ねるのに時間を要した。
- 2 当初は子離れが困難な状態であったが、徐々に園を信頼するようになった。
- 3 当初からあまり不安を示さず、子どもが園生活に入る過程を余裕を持って見守った。
- 4 当初から不安は殆ど示さず、子どもが園生活から得るものに積極的な関心をもった。

Q9. 保育者とコミュニケーションは取れていましたか？

- 1 必要最小限のコミュニケーションは行いが、保育者に心を開いた対話はしなかった。
- 2 当初は保育者に語りかけることは少なかったが、徐々に保育者との対話が増えた。
- 3 保育者との信頼関係が成り立つに従って、積極的なコミュニケーションが行われた。
- 4 当初より保育者との間で積極的なコミュニケーションが可能であった。

Q10. 保護者同士のコミュニケーションは取れていましたか？

- 1 他の園児の保護者と接触することは稀で、孤立している印象をもった。
- 2 少数の他の保護者と、必要なときにコミュニケーションをしていた。
- 3 他の何人かの保護者と安定した関係をもち、コミュニケーションをしていた。
- 4 特定の親しい保護者に限らず、広いコミュニケーションのネットワークをもっていた。

Q11. その他に特に気付いたことがあれば記述してください。

ありがとうございました。